

4 地鎮祭の歴史とその意義



茂木 貞純
MOTEGI Sadasumi

國學院大學 / 神道文化学部
教授

土木や建築の工事着手前には地鎮祭を行うが、その儀式ひとつひとつの意味について考えたことがあるだろうか。地鎮祭のはじまりは日本人が自然のあらゆる物に神が宿ると信じてきたことによる。地鎮祭の歴史をひも解き、その意義について解説する。

建物を建設する時、土木工事をする時、必ず地鎮祭が行われます。地祭とも言います。宮殿、神社、寺院、学校、役所、工場、個人住宅など多種多様な建物があります。様々な土木工事もあります。大概、地鎮祭は神式で行うことが多いので、それを前提に説明します。地鎮祭では、建造物等を建てるにあたり、その土地の守護神にその由を奉告して許しを得るとともに、土地や建物の堅固長久を祈り、合わせて工事の安全を祈ります。

地鎮祭の歴史

初代天皇である神武天皇が橿原に宮都を設けた時、宮殿の立つ大宮地には「坐摩神」が祭られていることが、『古語拾遺』(807年)に出ています。「坐摩」の説明に「是、大宮地の霊なり。今坐摩の巫の斎ひ奉れるなり」とあります。坐摩の巫とは、神々に奉仕する童女のことです。坐摩とは、生井神、福井神、綱長井神（以上、井戸の神）、波比祇神（境界の神）、阿須波神（地盤の神）のことで、五神あわせて敷地の神であります。おそらく宮殿の起工にあたっては、坐摩神を祭って地鎮祭が行われたと想像できます。因みに大阪市中央区に坐摩神社という古社がありますが、宮中に起源をもつ坐摩五神を祭っています。

持統天皇5(691)年10月に「使者を遣して、新益京を鎮祭らしむ」(『日本書紀』)とあります。藤原京の建設のための地鎮祭を実施した記録であります。詳しい内容は記されていませんが、地鎮祭が行われたことは確認できます。

伊勢神宮では、この前年から式年遷宮が開始されま

す。二つの敷地を設け、20年に一度、社殿を造替して、神々に遷っていただく祭りです。唯一神明造という掘立柱・高床式・茅葺で屋根に千木・鯉木を載せる素朴な建造物です。その建設に当り「宮地を鎮め祭ること」が行われ、鎮地祭と呼ばれました。その時の記録に「鐵人像・鏡・鉾各40枚、長刀子20枚、鉾4柄、鎌2張、小刀子1枚、鍬2口、五色薄繩各1丈、木綿・麻各2斤」(『延喜式』)とあり、当時の鎮地祭に使われた鎮物や祭具がどんなものであったか、分かります。鎮物とは土地の神への奉獻物のことで、穴を掘って埋納されます。伊勢神宮では、建物が完成した後も、社殿が永く久しくあるよう宮地の神々に祈る後鎮祭が行われます。祭式は、鎮地祭とほぼ同じです。

こうした例から、地鎮祭が早くから行われていて、宮殿や神宮の建設にあたり、宮地の神々を祭ったことが分かります。また個人の住宅などでも何らかの儀礼が行われたのではないかと想像されます。

伊勢神宮の鎮地祭

古代から行われてきた伊勢神宮の鎮地祭には、現代の地鎮祭にはない古風が伝えられています。神宮では、社殿が建ってない宮地を古殿地と言いますが、中央に旧心御柱の覆舎が建っています。ここを中央とし黄幣、東北隅に青幣、東南隅に赤幣、南西隅に白幣、西北隅に黒幣の五色幣を刺立て、中央に椀案二脚を設けます。

鎮地祭に奉仕するのは童女とこれを介助する神職です。神宮には現在童女の神役はいませんが、式年遷宮の諸祭は伝統を守って、神職の子女がこれを務めている

ます。童女はかつて地祭物忌と呼ばれていました。物忌とは清浄な奉仕者をあらわす言葉です。

奥の案に忌物(鉄人像、鉄鏡、鉄鉾、鉄刀子等)を載せ、手前の案に神饌と鶏卵を供えます。そして、案に向かって左側に竹籠に入った白鶏雌雄二羽を供えます。

祝詞奏上の後、拝礼が行われ、撤饌をします。その後、鎮地の儀が行われます。

鎮地の儀は、童女が行い、神職が介助します。先ず忌鎌を以て草刈初の儀、次に忌鍬を以て穿初の儀が行われます。最後に神職が中央に忌物を埋納し、退下します。その後、供えられた白鶏は境内に放たれることになります。

五色幣を中央・東西南北の角に刺立てるのは、明らかに中国の陰陽五行説の影響です。式年遷宮が開始された当時は、唐から様々なことを学び律令国家を樹立して行く時代でしたので、影響は大きかったと思います。しかし、童女が奉仕するところなどに古風を伝えています。

現代の地鎮祭の概要

祭場

建物が立つ敷地、土木工事が行われる場所の清らかな適地を選び、祭場を準備します。祭場は南面し、四隅に斎竹を立て、注連縄を張ります。祭場の広さは、大規模なビル建設と個人住宅では、奉仕する神職の数も異なりますので、適宜に対応します。斎竹の中が一般的に祭場となります。祭場の北側の中央に神籬台を設けます。神籬は、神を迎えるための施設で、中央に榊を立て紙垂と麻苧を付けます。

神籬の前に神饌案、玉串案を舗設します。神饌案には三方を並べて神饌を盛ります。神籬に向かって左側の適宜の処に祓案を設け、祓具を置きます。散供用の三方も準備しておきます。向かって右側の適宜の処に忌鎌、忌鍬、鎮物を置きます(図1)。

祭神

特定の祭神名はなく、「此の地を宇志波伎真坐す神等」(祝詞文)と申し上げることが一般的です。「うしはさます神たち」とは、土地を領有する神たちの意で、特定の神名を言いません。その土地をうしはく神たちの外に、その地域の氏神神社や大地神である大地主神を合わせて祭る場合もあります。



写真1 伊勢神宮の鎮地祭

鎮物

土地の神への奉獻品で、伊勢神宮の忌物(鉄人像、鉄鏡、鉄鉾、鉄刀子等)と同じように準備します。神具店から購入するわけですが、一般に神職が準備してくれます。ただ、こうした物を準備できない場合もありますが、そのような場合に古來行われてきた方法がいくつかあります。

- ア 氏神神社等の清き砂を二枚の土器の中に入れ麻苧で十字に結んで埋納する方法
- イ 五色の幣束(青・黄・赤・白・黒)の一束を麻苧で括って納める方法
- ウ 神籬の芯を、祭典終了後にとって納める方法

式次第

① 手水

先ず手水をして、祭場の決められた席に着く(祭場平面図)。手水は手を洗い、口を漱いで、心身を清める儀式です。

② 修祓

御祓の儀式で、神職が祓詞を奏上し、続いて大麻にて左右左と祓う。次いで塩湯で祓う場合もある。祓詞は、禊祓詞とも言い伊邪那岐大神が日向国の阿波岐原で禊祓をした時、祓戸大神が生まれ、その神徳により罪穢れを祓い清めていただくよう祈る詞です。大麻は、榊の枝に紙垂と麻苧を付けた祓具です。塩湯は、器に塩と湯を入れてふり注ぐことにより祓うものです。祓清めることを徹底します。祓う順は、祭場、神饌、玉串、斎主、祭員、建主、工事関係者、その他参列者等です。

③ 降神の儀

齋主が降神詞を唱えて、神籬に神を迎える儀式です。降神詞は微音で唱え、この時警蹕を行います。警蹕とは「オ…」と声を発して、参列者一同に神の降臨を知らせる意味があり、この間一同は低頭しています。

④ 献饌の儀

神職が神前に神饌を供えます。お米、御酒、御餅、海魚、川魚、海菜、野菜、果物、菓子、塩、水など新鮮なものを準備して供えます。お供えの順序も概ねこの順に致します。神饌をあらかじめ神前に供えておいて、御酒の入った瓶子の蓋をとることにより、献饌の儀とする場合もあります。

⑤ 祝詞奏上

齋主が祝詞を奏上します。その趣旨は、この地をうしはく大神に、建物をつくるに当たり地鎮祭を行う旨奉告し、この土地や建物の長久、工事の安全、建主の長久発展などを祈ります。祝詞はその都度作文しますので、詳しい情報を伝える必要があります。

⑥ 散供の儀

齋主が、敷地を祓い、散

供を行います。敷地の四隅、東北、東南、南西、西北の順に行い、最後に中央にて行います。その方法は、齋主が先ず大麻で祓い、次に米・塩・切幣を合わせ盛りにしたものを、左右左と大地に散供します。次いで清酒を大

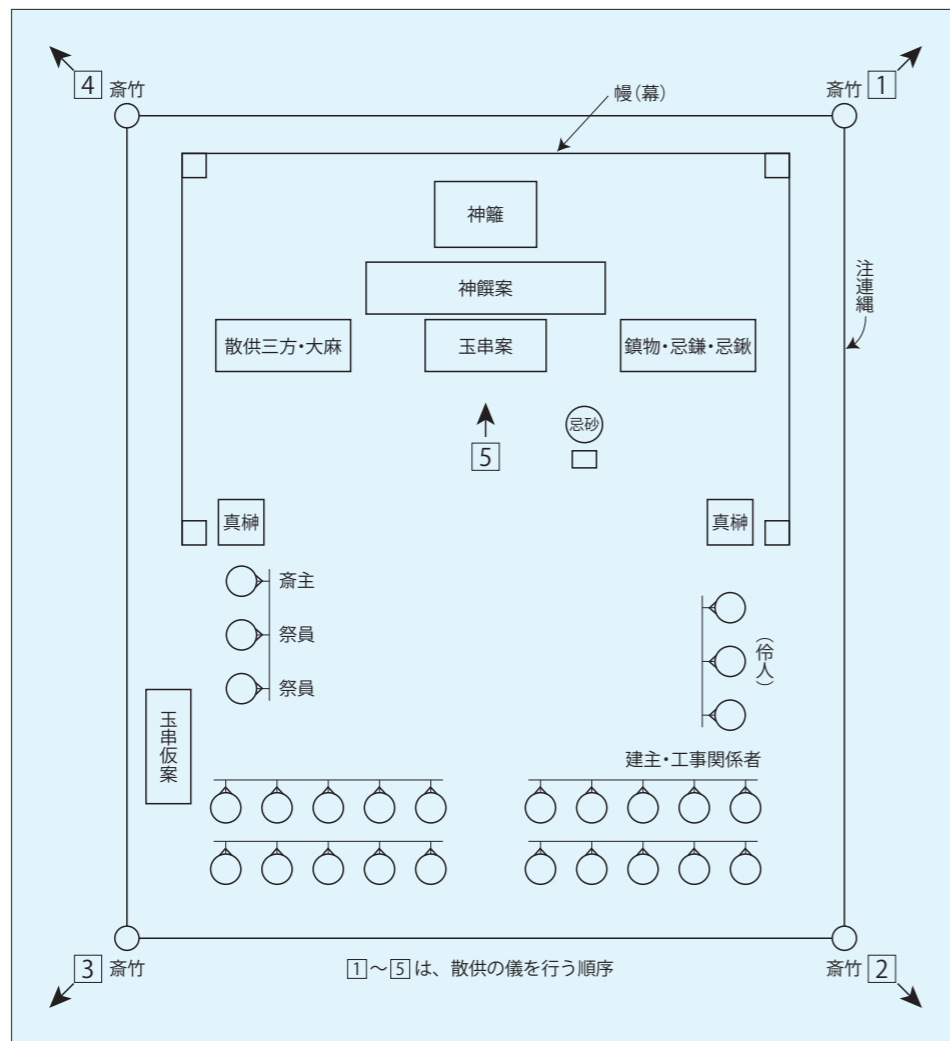


図1 祭場平面図の一例



写真2, 3 祭場の設置例

地に左右左と散供します。散供とは大地の神に直接お供えする意味があります。

⑦ 草刈初の儀

忌鎌を以て、神前にて草刈初を行います。建主が行うことが多いです。その土地を使用させていただくに当り、先ず草を刈ることから始まるからです。

⑧ 穿初の儀

忌鍬を以て、神前にて穿初を行います。工事関係者が行うことが多いです。工事を始めるに当たり、最初に鍬を入れる儀式です。

⑨ 鎮物埋納

神職があらかじめ神前に準備した穴に、祈念をこめて埋納します。地鎮祭の時は、仮に埋納する所作のみで、工事に当り敷地の中央に埋納します。

⑩ 玉串拝礼

齋主、祭員が玉串拝礼します。次に建主、工事関係者、参列員等の順に玉串拝礼します。

⑪ 撤饌の儀

神職が神饌をお下げします。最後に供えたものから順にお下げします。瓶子の蓋をすることで撤饌に代える場合もあります。

⑫ 昇神の儀

齋主が昇神詞を唱えて、神籬に迎えた神を送ります。この時、警蹕を行い、一同は低頭します。

⑬ 直会

席を変えて、直会を行います。神前に供えた神酒を一同で頂き、神威を受けて工事の安全や建主の長久発展を祝います。



写真4 穿初の儀



写真5 個人の住宅での地鎮祭の例

自然に宿る神

私たち日本人は、自然のあらゆる物に神が宿ると信じています。地鎮祭が必ず行われる背景に、こうした信仰が生きています。伊勢神宮では、社殿の用材を伐採する時には、先ず山口祭を行い、山の神に許しを得てから、山に入り伐採します。用材の伐採に当たっては、木本祭を行い、木本神を祭って伐採します。

井戸を掘ったり、埋めたりする時には、必ず井戸神を祭ります。屋敷の樹木を伐採する時も、お祓いをする人が多いです。建物、道路、橋梁、トンネル等の工事に際しても、その土地の神を祭る地鎮祭を行います。

私たち日本人は、自然のあらゆるものに神が宿って

て、自然物を採取したり、利用する時には必ず神々の許しを得なければならない、と思っています。そうしないと神々の祟りに遭い、予期しない事故が発生したり、関係者に重大な危機を生じさせたりします。「祟る」とは、言葉の本来の意味は、現れて神威を示すことで、後に神仏が罰をあたえる意となったのです。自然を恐れ憤む心が先ず初めにあったのです。森羅万象すべてに神々が宿り生命があると考えてきた信仰が存在したのです。

<図・写真提供>

- 図1 著者の作図を基に株式会社大應が作成
- 写真1 神宮司庁
- 写真2, 3 日本工営株式会社
- 写真4 基礎地盤コンサルタンツ株式会社
- 写真5 山上英之